



## 遊びと成長

小川 正 通

ここに紹介しようとする「遊びと成長」Play and Growth は、イギリスの女流心理学者として有名なスーザン・アイザックス Susan Isaacs 博士の著「乳幼児期」The Nursery Years (第二版一九三二年) のアメリカ版の第二章であつて乳幼児の理解のために相当役立つと思う。アメリカ版を出すにあつて、わが国にもおなじみのコロンビア大学のシャーシルド博士は、すぐれた著作だと讃辞を贈つてゐる。

### 一、人間の幼児と動物の仔

まず広く生物史の見地から、人間の子供を考えていく。人間の幼児と動物の仔とを比較して、第一に気がつくことは、人間の赤坊は、他の如何なる動物の仔よりも、はるかに無力 helpless であつて、親の保護なしには、全く生存できないものであり、また子供の時期が非常に長く続くものであるとい

うことである。第二には、人間の子供は如何なる他の動物の仔よりも、はるかに大きい学習能力 Capacity for learning をもつてゐることである。もちろん哺乳類全体が、比較的固定した本能によつて、生活すると見られるような昆虫、爬虫類或は鳥等とくらべると、個人的経験により学習する大きい可能性をもつてゐる。そして同じ哺乳動物の中でも、或る動物は他のものより、一層多く教え得る teachable ものであることがわかる。一般的にいえば、無力であり、親の保護に多分に依存せねばならないものは、或る種の動物の仔であつて、しかもその保護が長期に亘るものほど、その種属の個人的成員として、知的でありまた適応的であつて、その生活行動が固定的、遺伝的であることが少ないのである。そしてこのことは、人間について最も適確にいえるのである。即ち人間において、その幼年期が非常に長く、多大な保護を必要とすることは、人間行動の固定的、生得的様式が少ないことと個人的経験により益される(また失われる)能力が極めて大きいことと緊密に結びついている。これが幼年期の生物学的意味と見るべきであり、またこれが人間文明の基礎をなしてゐる。

### 二、遊ぶ動物

さらに、順応的、知的動物とそうでない動物即ち哺乳類と爬虫類や魚とを比較するとき、われわれは人間の幼年期を光

輝あらしめてゐる「或るもの」に気がつくのである。それは「多く学ばざることのできる動物が多く遊ぶこともできる」

The animals which are able to learn more are also able to play more 云々の事實である。固定的・遺伝的本能をもつ動物は全然遊ぶことをしない。即ち仔が初めから大人として行動するのであつて種属の本来もつてゐる知慧に何物も附加するところがない。しかるに遊ぶ動物はその遊ぶことと比例して或る種の個人的知慧を獲得できる。それは好奇心をもつ実験的な動物 the experimental animals である。仔羊もスキップをするが、それは短時間だけだし、小猫もたわむれるが、少し大きくなると余り遊ばない。ただ人間に最も近いといわれる猿類だけは、成熟に至るまで遊ぶ意志をもつてゐる点で、われわれ自身に似てゐる。しかし如何なる動物の仔でも、人間の子供のように自由に、創造的に絶えず長くは遊ばなす。

要するに、遊びは学習する動物にとつて、その發展手段としての多くの意味をもつてゐることがうかがわれる。そして子供の遊びの観察者は、遊びが個人教育の自然的意味をもつてゐることを知ることができた。実に遊びは、子供の仕事であり、また子供の成長發達のための手段なのである。即ち子供の活動的な遊びは、その精神的健康のサインであり、遊びの欠除は、生得的欠陥か或は精神的疾病のサインであるといえる。

### 三、遊びの意味

如何なる遊びが、真に子供に對して有意味であるかを十分明らかにするためには、彼の當面する現在と環境への順応に必要な要求との關係の中に、それを見ていかなければならない。年齢の違う子供達が遊んでゐるのを見てみると、それぞれその遊びを通して、熟練・力・理解力の増大に役立つようなことをやつてゐるのがわかる。例えば一才前後の幼児は、喜び繰返して音声の練習を試みるが、それはやがて言葉となるのであつて、彼の音声練習は、言葉の学習に他ならないであろう。また登つたり、跳んだり、走つたり、スキップをしたりボールを投げたりすることは、年長児の楽しんで試みる場所であるが、その反復は脚・腕・指の強さと敏捷さとの發達に役立つ。

かようにして子供は、遊びを通して、諸々の世界についての彼の知識を増進してゐる。健康な幸福な子供は、決してじつとはしていないで、絶えず自己の周囲のあらゆるものを探索してゐる。―それは口でふれることから始まり、次いで能動的な接触へと進む。また物を引きさいたり、物の内部を見ようとして試みたり、水道の蛇口を開いたり、本を棚から引きずり出したたり、人形が燃えるかどうかを知るために、火の中に投込むことさえやりかねない。好奇心に充ち、なんでも試みることにしては、如何なる実験的科学家といえども、普通

の健康な活動的な子供の足下にも及ばないものである。

しかし子供の遊びがすべて、物質界の探求や新しい熟練を指向しているものとはいえないのであつて、その多くのものは、社会的なものであり、また想像界に属している。幼児は父や母になつて遊んだり、生れたての妹や巡査や兵隊となつても遊ぶ。旅行ごっこや寢起の遊びも試みる。それらは彼が大人の行為として知つてゐる一切のものに及ぶであろう。そしてそれらを通して彼は、次第に社会的順応が容易になつていく。父母となつて遊ぶ場合には、彼は父母の自分に対する態度を想像的に洞察しているのだし、また父母の言行も幾分か理解して遊んでいるわけであつて、しかもその遊びの隣間においては、父母の力と才能（父母がもつてゐると彼が考へてゐるような）とが、自分自身にも存在してゐるかのやうに感じている。さらに彼がなし得ないことや現実の生活では在りえない一切のことが、この遊びの世界では、なすこともでき、また在り得るのである。従つて遊びは、彼をして現実的要求に基づく刻々の圧迫から逃避させて、この楽しい境地へと向わせてゐる。

#### 四、教育としての遊びと問題解決への方向

遊びの深い意味について述べるのは、後に譲ることとして子供の遊びがその成長のあらゆる面でもつ大きな価値に關しては、以上で一応十分であろう。その価値を見出し得た親は

子供にとつて大きな味方というべく、反対に、子供の健康のサインであるこの大きな流れ（遊び）と活動的な衝動とに抗する親は、運命的というべきである。じつと休んでおられないこと、静かに坐つてゐられないこと、おいたや、内部を見ながら、絶えず「何故」と繰返し聞くこと、走つたり、登つたり、掘つたり、探究するために手がよごれ、服がさけそれでも平気でいれること。——これらは決して除き得るやうな幼年期の不幸な偶然的なものではない。かえつてそれこそは、人間の子供の光榮であり、彼の人間の遺産なのである。

*The glory of the human child, his human heritage*  
またそれらの遊びは、人間の冒険心や苦心して初めて獲得される知恵を代表してゐるといえるし、同時に知識や熟練を進めていく手段でもあるわけである。

要するに、幼児が自己のスプーンを投げ落し、少し大きい子がよじ登り、マッチをつけて見たり、壁に書くこと等を喜ぶことにおいて、今やわれわれは、或る意味を理解することができるのである。そして教育者の立場からは、次のやうにいうことができる。即ち家庭では、大人の所謂生活を破壊してしまわない範囲内で、この教育的価値の高い子供の遊戯衝動を十分満足させてやらねばならない、と。もし子供が静かに坐り、一日中清潔にしているのでなければ、幸福でないと考えような大人は、子供自身に罪があるのではなく、大人の考え違ひである。またもし子供に対して、それは黒板でも

壁でもいいが、チョークで書く対象を与えないならば、そのときに利己的、妨害的なのは、大人の側であるといえる。もちろんそうはいつても大人の愉快と便利とは、子供にとつてすべて非合理的要求だというのではない。従つて大人の要求が、子供達に対して非教育的にならないように、十分工夫することが肝心である。そしてもし大人の愉快と便利とが、子供のゲーム遊びを妨げがちであることを率直に認めて、その遊びを子供の「いたすら」とけなさないようになるならば、われわれ大人が少なくとも一歩前進したといひ得るのである。

## 五、子供と大人

さらに、子供の一般的特色を見ていこう。もし幼児、子供の肉体と大人のそれとの比較を試みれば、非常にはつきりするのは、両者の相違が単に大きさ *size* のそれだけでなく、種々の部分の割合の相違であるということである。例えば赤坊の頭は、大人の相対的な大きさの約二倍もありながら、その脚は四分の三に過ぎないし、腕はそれより少し長いに過ぎない。従つて成長とは、全体の大きさの単なる増加でなくて、肉体の各部分の種々の増加である。そしてそれはそれ自身決して偶然なことではなくて、発達各段階における一全体としての肉体の要求と関係しているのである。例えば新生児は、ミルク以外のものを消化し得ないし、眼と耳も発達していない

ので、自己の始末ができない。そして彼は自分を保護してくれる母の腕と栄養を提供してくれる母の胸とに、全然依存している。彼の要求は何んでも満足される。といつてもそれは彼の母にすがりつき、乳を吸うことである。従つて新生児の脚は、小馬の脚のように長いことを要しないし、胎内でのように屢々組合せたままである。

そして生理的な相違も、以上のような外形上の相違に相伴うものである。例えば骨はその初め非常に軟かいが、脚が真直になり、一定の長さになつてくると、骨が次第に硬くなつてくるだけでなく、——それに肉体を真直に保つことができようになるし、また視覚、聴覚、触覚も発達してきて、一年目には歩行を可能とさせる筋肉の力が増進し、バランスもとれるようになつてくる。さらに「でんぶん」質の食物も消化し得るようになり、今や彼は従来以上の自由な活ばつた運動を求めるところの、一層大きなエネルギーの根源を獲得し始めるのである。

以上のような肉体的成長と肉体の要求との関係の事實は、明白であり理解し易い。新生児が肉やパンを消化できないからといつて、その子は病氣であると想像したり、また彼がスプーンを持ち或は歩き或は話すこと等ができないからといつて、彼を異常と考えるものはないであらう。われわれは子供がそれらのことをなし得べきであると考えることも、われわれ自身のようになさせようと強制を加えることも共に誤りで

ある。即ちわれわれは子供の現状を把握し、その現実的要求に即応するのだからなければならない。いい換えれば、われわれは子供の正常な発達の現実的な事実の上に、健康な且つ希望すべきものについてのわれわれのアイデアを立てることである。

## 六、精神の成長（発達）

子供の精神について、以上と同様な直接的な観察を進めると、子供と大人との精神上の相違の一般の様式が、その肉体的成長の各段階と密接に結びついていることがわかる。しかし精神の成長は、肉体的成長の場合のように、それを簡単に且つ明瞭に見ることは、中々困難である。しかも全体的について、われわれは二つの対立する方向において、誤りがちである。即ちその第一は、乳幼児が全く精神をもたず、肉体的要求のみであるかのように考え扱うことであり、第二に三才から五才に達すると、われわれ大人と同様な責任ある道德的な存在であるかのように仮定することである。われわれは、生れて二年目の幼児については、その観察力、印象のためのレディニス、親に対する感情の深さと強さとを全く低く評価し過ぎていきらいがある。それに反して、話をしたり聞いたりできるようなつた幼児においては、もしわれわれが要求するならば、少なくとも外面上は、ていねいにふるまつたり、秩序を守つたり、利己的でない行為もなし得るので彼等

の能力を高く評価し過ぎて、われわれの道德的人格の基準に従つて生活もでき、大人の習慣を理解できるかのように誤認しがちである。

恐らく両者の誤りは、言葉の幻覚 *illusion of speech* に基ずくのである。即ち幼児は啞にも近いから、精神をもつていないと想定し、よちよち歩きの子 *toddler* は、われわれの言葉の若干をもつているから、われわれと同様に感じ、なし得るといふことを殆んど疑わないのである。そして子供の言葉の意味するところのものが、多くの面において大人のそれと異つていふことを悟らない。しかし子供の言葉を研究するものには、それはすぐ明らかになることであるし、また幼児が言葉を学ぶときに、如何なる世界が好まれるかについてわれわれが知るならば、子供の言語の意味するところのものが明らかになる。もちろん子供の言葉は、子供の判断や推理よりも、一層その感情及び意志と緊密に結びついているものであつて、しかもすべてそれらは、その肉体的成長と連結しているのである。一体、精神的成長が同時に肉体的成長と結びついているということは、単純なことではなくて、両者は各段階において互に最も密接に結び合つていふことである。まだ離乳していない赤坊と自由に走り廻る子と、盛んに質問をする四才児と大人とは、それぞれその世界が異つていふのは当然である。とはいつても子供と大人との間には、多分に共通な人間自然（性） *human nature* が存在してい

ることは疑えない。それにも拘らず、子供も大人もそれぞれ精神生活の彼自身の仕方及び特殊な要求をもつているのである。そしてわれわれの研究目的のために一層重要なことは、恐らく相似 *Ikenesses* を強調することよりも、相違 *Differences* を理解することである。

## 七、子供の世界

乳幼児が好んで求める世界が如何なるものであるかについて、明瞭なアイデアを得ることが容易でないのは、それがわれわれ大人のもとの非常に違つているからである。しかし幼児について、その語るところのものを辛棒強く聞き、また彼等を理解しようとの目的のもとに、そのなすことをよく看守るならば、われわれは彼等の怖れと怒り、当惑と喜び（凱歌）とを想像的に感じることができるのである。また彼等の意志を意志し、彼等の絵を理解し、思想を考えることも可能である。しかし三才の男児が驚きながら、その親しい大人に次のようにたずねる場合、即ち

「何故に、人々が何もしなさんなといわないときには、人々は無為であらうとしないのか」

また

「人々がいおうとしないことでも、静かに質問しかけると、どうぞといわないときでも、答えてくれるのか」と。

これは小さい一例に過ぎないが、われわれは大人のマナー

の、*manners* 或はきびしい或はきままな規則が、幼児に与えるであろう当惑について、急に思い当らざるを得ない。しかしわれわれは、幼児に対してその言葉の停滞さえ直してやることができないのである。

言葉をもたない乳児の世界を十分明らかにするには、さらに厳密な一層辛棒強い研究を要するし、想像作用の飛躍をも必要とするけれども、もし、如何に乳幼児の成長が進行するものであるか、彼の困難は一体何であるか且つ如何にそれらを克服して、彼を助けるべきか等について、十分知りたいのであるならば、われわれはその取得に遇進する以外に方法はないであろう。

### 初等教育実験学校研究発表（文部省）

さきに文部省においては昭和二十七年年初等教育実験学校を指定して、初等教育に関する実験的研究を依頼しておつたが、このたびその研究発表会を開くこととなつた。ここに幼稚園関係について記する。

記

1. 実験指定学校 東京学芸大学附属幼稚園
2. 研究発表会場 東京学芸大学竹早分校講堂
3. 期 日 昭和二十八年五月十三日午前八時—午後四時
4. 参加者 幼稚園関係者、指導主事
5. 研究題目 幼稚園の教育課程について